

パラリンピックと聴覚障害者

徳安 利之

八十七か国の国が参加し、フィギュア男子羽生選手の金メダルや、ジャンプの葛西選手など、日本人選手も活躍し、熱戦が繰り広げられた、第二十二回冬季オリンピック・ソチ大会の余韻を残した、ロシア・ソテのフィシュト五輪スタジアムで、障害者スポーツの祭典、第十一回冬季パラリンピック・ソチ大会が開幕した。直前のウクライナの政変で、ボイコットも心配されたが、冬季パラリンピック最多の四十五か国五百人を超える障害者選手が集った。日本からも二十人の障害者アスリートが参加し、アルペンスキー男子滑降座位の狩野選手の金メダルなど、諸選手が熱戦を繰り広げ、四年後の韓国・ピョンチャンに夢を託して閉幕した。

ところで、世界のさまざまな障害者が一堂に集い、熱戦を繰り広げるスポーツの祭典パラリンピックではあるが、パラリンピック委員会から参加の認められていない障害があることを、世間は承知しているのだろうか。私は還暦がすぎた聴覚障害者の老いぼれ。子供の頃から病弱でスポーツは何をしても下手でプロ野球やオリンピックをテレビ観戦する程度の関心しかもたないまま、いつのまにか人生を振り返る年代になった。こんなスポーツとは無縁な私だが、パラリンピックに聴覚障害者の参加が認められていないことに、疑問の思いを述べたい。

先の二〇二〇年のオリンピック、パラリンピック開催都市を決める国際オリンピック委員会の総会で、パラリンピック陸上選手の伊藤さんやニュースキヤスター滝川クリステルさんたちのインパクトのある素晴らしいプレゼンテーションで東京開催が決まり、日本中が沸き上がったところだ。つい最近には森元首相を会長に東京五輪・パラリンピック組織委員会も誕生し、本格的に準備が始まった。

パラリンピック委員会が公開している資料によると、パラリンピックは、第二次世界大戦の負傷兵の治療と社会復帰のために、イギリスのストークスマンデビル病院に設けられた脊椎損傷科のグッドマン博士がスポーツを治療に応用して、車椅子のアーチェリー競技大会を始めたのが原点で、のちほど「国際ストークマンデビル大会委員会」が設立されて、国際競技大会となった。その後で脊椎障害者以外の視覚障害者球技や肢体障害者競技も参加が認められるようになり、障害者の国際競技

大会に発展した。一九八六年、聴覚障害者の国際競技団体である「国際聴覚障害者スポーツ協会」や、「国際知的障害者スポーツ連盟」も加盟が認められていたが、組織が機能せず、結局除外され現在に至っている。当時なぜ除外し、そのままパラリンピック委員会を立ち上げたのか、そしてそれがもつて、現在も引き続き除外されたままであることを考えると、当時の決断にはなほ疑問を感じる。

「国際パラリンピック委員会」が正式に創設されたのが、一九八九年で、国際オリンピック委員会と比べると歴史はまだ若い。パラリンピック委員会の理念は障害者にスポーツ活動の機会を提供する「機会均等と完全参加」だと、パラリンピック委員会の資料には記されているが、それならばなぜ「国際聴覚障害者スポーツ協会」などに復帰を呼びかけなかったのか。それとも呼びかけたが拒まれたのか。

二〇〇〇年に開催されたシドニーオリンピックの時に、国際オリンピック委員会と国際パラリンピック委員会で協定が結ばれ、オリンピック開催都市でオリンピック開催後にパラリンピックの開催が義務付けられた。その後のアテネ、北京、ロンドンと、「もう一つのオリンピック」と呼ばれる、華やかな障害者のスポーツの祭典となり、現在のようにパラリンピックがオリンピックと同列に取り扱われるようになった。

パラリンピックが草創期の脊椎障害者の国際競技大会、「国際ストークマンデビル競技大会」から、「国際身体障害者スポーツ大会」へ発展し、脊椎障害者だけでなく、視覚障害者や、肢体障害者などの競技の加盟を認め、すべての障害者のスポーツの最高の舞台だとして、国際的に認知され代々実施されている以上、聴覚障害者競技をいまだに除外しているのは、不条理ではないか。

パラリンピックはマスコミも障害者アスリートの皆さんの日頃の努力や活躍の様子を取り上げ、茶の間でもその活躍や練習に苦勞している様子がテレビでも放映されるようになり、身近に感じる国際競技大会になった。聴覚障害者アスリートも脊椎障害者や肢体障害者と同じように日頃から練習を重ねベストを尽くそうと努力をしている。しかし、その様々な障害者が一堂に集う障害者の祭典、パラリンピックが、ろうあ者、難聴者などの聴覚障害者の競技の参加が認められていないことを、世間は知っているのだろうか？

二〇〇〇年開催のシドニーパラリンピックから、開会式の様子を注視して来たが、前回のロンドンパラリンピックでも聴覚障害者の競技の参加がなくて疎外感と失望

で、残念に思いながら開会式の様子をテレビで眺めていた。世界の様々な身体障害者アスリートが、一堂に集い競技を繰り広げているときに、聴覚障害者アスリートが全く参加していないことに気付き、是正を呼びかける人が、政府やパラリンピック委員会や各スポーツ関係者にはいないのだろうか。

確かに聴覚障害者は特別な競技がなくても、一般のスポーツをすることは出来る。だからといって、世界の様々な障害者が一堂に集い競技を競い合っているときに、聴覚障害者は蚊帳の外でいいのだろうか。「全国身体障害者競技大会」では聴覚障害者競技もあり、聴覚障害者も堂々と参加している。その辺の整合性をオリンピック委員会やパラリンピック委員会は、どのように考えるのか。なぜ障害者として同じ扱いができないのか。

サッカーやバレーボールなどの団体競技は人数や参加チーム数などで困難な事情があるかも知れないが、陸上競技や水泳競技などの個人競技は一人でも参加できるわけだから、関係者が英知を絞り標準記録をクリアする聴覚障害者アスリートも参加できるようにすべきだと考える。それがパラリンピック委員会の理念や、参加することに意義がある、というオリンピック精神、並びに国連の定める障害者憲章の精神に適うと信じる。

パラリンピックが世間で認知されたのは、オリンピック委員会との協定後のことであり、パラリンピックが始まった草創期のわだかまりは忘れ、様々な障害者が一堂に集う、まことの障害者のスポーツの祭典になることを願っている。

次回のブラジル、リオでのパラリンピックには間に合いそうにないが、せめて二〇二〇年の東京大会では聴覚障害者アスリートも参加した、全ての障害者が一堂に集う、まことの障害者のスポーツの祭典パラリンピックになることを願っている。



徳安 利之

一九五二年生まれ
広島市在住
子供の時に失聴し「全ろう」となる。一般中学校からろう学校に転校。その後また一般高校に進学。
一般歯科技巧専門学校を経て歯科技工士となる。
二十年前に現在勤めている医療器具製造会社に転職し現在に至る。